短期大学新入生を実際の研究に参加させる試み

――本学栄養健康学科における新しい初年次教育実践報告――

木　村　秀　喜

A trial of learning support system for students in Shimonoseki junior college to join in research activities with a teacher as the first-year experience

—Report on a new education practice of the first-year experience in Department of Nutritional and Health—

by
Hideki KIMURA

1．はじめに

近年、各大学・短期大学がFD（Faculty Development）を積極的に導入する中で、初年時教育の重要性について、論議が充実し始めている。

山口県立大学の水津久美子は、日本栄養士会平成18年度全国研究教育栄養士協議会中国・四国ブロック研修会で「1年次からの学習意欲の向上を目指して」[1)]と題して、事例報告を行っている。また、初年次教育について論文検索をすると多くの論文を検索結果として確認することが出来る。

短期大学における初年次教育の実践報告を探すと「短期大学からの挑戦――高知学園短期大学　教養実践記録――」[2)]がある。これは教養科目の教員が5名から10名程度新入生をゼミ生として、1年間かけて育てる試みである。

このように4年制の大学、2年制の短期大学ともに初年次教育の充実が重要と考えられている。

一方で、本学の学生は大学入学を目的とした教育を受けてきたものは少ない。調理や農業といった職業科目を履修してきたものが、多数入学してきている。このようないわゆる偏差値教育に疲弊してきていない学生は、学習に対する嫌悪感や拒否感を持たず、むしろ積極的に取り組む姿勢があるのではないかと考えた。筆者は、「いろいろやってみたい！」と考えワクワクして入学してきた学生がいると期待したのである。

そこで4月中旬に「研究お手伝い生（プレ・ゼミ生）」を募集し、実際に共同研究している

教員の２つの研究に対して３ヶ月間のお手伝いを実施した。お手伝いは、アンケート調査質問紙の作成補助と、アンケート結果の集計・分析、発表のためのデータ加工である。これらのことを限られた時間の中で実施したものである。

本報告は、僅かな期間であるが新入生と共に学んだ教育実践報告である。

なお、この試みの基本的な目的、運営方法は、20数年前に国立東京工業大学工学部附属工業高等学校公害研究会（指導教官中村豊久、当時)、千葉県立衛生短期大学栄養学科高居研究室（教授高居百合子、助手渡邊智子、共に当時） が実践された教育手法を筆者が本学に適用したものである。

２．実施の目的

本取り組みの目的を次の６つとした。各目的は、単独に存在するものではなく、相互に関連している。

（１）興味の充足

新入生は短期大学に入り、多くのものを学びたいと思っているものが複数いると考えた。それらの学生は学ぶ材料を欲しているものと考え、そのニーズに対する充足を一番重要な目的とした。その目的達成のためには、知的好奇心を満足できる題材を提供する必要がある。

（２）研究の基礎知識の付与

高等学校までの勉強ではなく、研究といった分野がいかなるものかに触れてもらうことを目的の一つとした。これは本学のように保育士や栄養士といった資格取得を目的とした短期大学は、資格習得(資格に関する技能・知識の付与)教育に偏重しやすい。しかし、短期大学として知的生産能力を養う機会が必要と考えた。本学では、２年後期(平成19年度から２年前・後期)にゼミナールを開講するが、早い時期に知的生産能力育成を開始する必要があると考えた。

また、倫理や個人情報の保護といった面もこの目的に含めた。

（３）研究室におけるマナーの付与

高等学校までの集団を中心としたマナーではなく、研究室におけるマナー・ルールを付与することを目的とした。

（４）学習・研究に関する協力体験

アンケート調査としては大規模なものではないが、分担して行うことの大切さ、難しさを体

験することが重要と考えた。また、教えることの姿勢、聞くことの姿勢は、栄養士としての資質として重要である。

（5）学生と教員のコミュニケーションの向上

１年生に対する筆者の授業は、すべて講義形式である。そのために授業だけでは、コミュニケーションをとることが難しい。そのために本取り組みをコミュニケーション向上の一手法とした。

（6）本学教育理念の理解

本学の教育理念である「温雅にして礼節をたっとぶ」を理解させる一助にした。この教育理念は、協調と信頼に基づくふれあいを通じて「自由と責任」への認識を深め、人を思いやる心、自らを律する心を磨くとともに、社会に適応する深い知識や高い技能の修得を目指すためであるとされている。

本教育の試みは、この理念を具現化かするための一助にしたいと考えた。

3．実施方法

今回の教育の試みは、本学として始めての手法であり、また筆者が着任して間もないことから十分な実施計画を立てないうちにすすめてしまった。本来であれば、適切な教育計画と学内での合意が必要と思われるが、入学して間もないことが重要と考え、学科会議で合意を得たことにより、出来る範囲のことを実施することで開始した。その内容を次に示す。

3・1　お手伝い研究の内容検討

新入生が期待に胸を躍らせている４月中に開始し、前期末試験前にある程度終了する研究が良いと考えた。その時点で研究計画中であった「介護食調査」と「食育調査」を研究内容とすることにした。概要を次に示す。

（1）介護食調査の概要

目的：山口県下関市の訪問介護現場における介護食の現状把握等

対象：訪問介護実施事業場のヘルパー業務責任者

規模：対象者 76 名

時期：質問紙の作成　４月下旬から５月中旬

　　配布・回収　　５月下旬から６月上旬

実施方法：質問紙による郵便調査

集計方法：表計算ソフトエクセルによる単純集計

（2）食育調査

目的：幼稚園食育推進事業における初期の幼稚園児食生活現状把握

対象：付属幼稚園の保護者

規模：対象者 169 名

実施時期：質問紙の作成　4 月下旬から 5 月中旬

配布・回収　　5 月中旬

実施方法：質問紙による郵便調査

集計方法：表計算ソフトエクセルによる単純集計

3・2　プレ・ゼミ生の募集

募集は、筆者の講義終了時に口頭で、1 度だけ通知した。これは、講義終了時であってもしっかりと聞いている人材のみを募集するために不親切な募集方法をとった。募集期間は、1 週間とした。

3・3　プレ・ゼミ生への説明の概要

技術的、具体的指導は、作業の進捗に応じて個別に指導した。また、様々な相談は適宜受けながらすすめた。ここでは、プレ・ゼミ生に募集し、はじめの集まりのときに説明した内容を示す。

（1）活動時間

活動時間は、9:00 から 19:00 の間で、講義に影響しない範囲とした。

講義が無いときであってもレポート作成がある場合は、それを優先させることとした。

（2）調査の概要

3・1 で示した調査の概要とともに学会発表や食育推進事業についてもその意義、困難性について説明した。

（3）アンケート調査の注意点

質問紙調査についての一般的注意事項、調査に関する守秘義務、個人情報の保護、倫理について、説明した。

（4）研究室・研究中でのルール

研究室内のロッカーや机の使い方、挨拶、お茶等について、説明を行った。

また、研究室以外で研究活動をする場合は、ホルダー式の名札を着用するようにした。これにより、研究活動と私事の区別を促すとともに、情報処理室の活用時に他の教員から見てプレ・ゼミ生と判別させる目的があった。

重要なこととして、プレ・ゼミ生間の自主・自律活動を主とすることにし、技術的な問題以外はプレ・ゼミ生間で解決するようにお願いした。これは、本学の教育理念である「温雅礼節」を実践するために重要な事項となる。

3・4　プレ・ゼミ生の実施内容の概要

プレ・ゼミ生は①質問紙の検討 ②配布・回収等の事務 ③作業調査結果の入力 ④入力データの加工を実施した。なお、介護調査と食育調査ともに同様な事項を実施したのであわせて示す。

4．実践結果

教育実践結果として、自主的に参加していただいた学生の概要と実施結果の概要、目標の達成状況について示す。

4・1　参加者の概要

新入生 42 名のうち 10 名が参加した。全員が女性で、現役で合格したものであった。

出身課程は、農業系 4 名、調理系 3 名、普通科 3 名であった。農業系は、 2 校 4 名全員が参加した。新入生の 26.2%が調理系出身であるのに対し、プレ・ゼミ生のそれは 30%であった。

新入生とプレ・ゼミ生の状況は、表 1　新入生とプレ・ゼミ生の性別、入学時年齢別、出身学科別人数の通り。

表 1　新入生とプレ・ゼミ生の性別、入学時年齢別、出身学科別人数

	総数	性　別		入学時年齢		出身学科		
		男	女	18歳	18歳以外	農業系	調理系	その他（普通科等）
プレ・ゼミ生	10	0	10	10	0	4	3	3
栄養健康学科 1 年生	42	4	38	39	3	4	11	27

4・2　実施結果の概要（お手伝いの成果）

実施結果は、目的の時期までに各々の調査を実施し、データの加工の基礎までを行った。これらの内容、精度は十分に当該調査研究に必要なレベルであった。

特に質問紙の検討は、簡単な質問紙のチェック方法、つくり方を解説しただけであったが、質問項目の適否、質問・回答文の表現、質問の順番と多岐にわたり、プレ・テスト実施と同レベルの内容であった。

また、調査結果の入力は、当然ながら誤入力があったが、簡単な説明により、ゼミ生間で援助しあいながら、高い精度での入力を行った。なお、入力内容の最終チェックは、筆者とゼミ生が協力して読み合わせをした。

4・3　目標の達成状況

目標の達成状況を次に示す。本来であれば、参加学生にアンケート等を実施し、客観的なデータを示すと教育手法の研究となるが、今回は教育実践報告として、筆者が感じた事項をまとめた。これは、人数が少ないので無記名調査にはなりにくく、インタビューにおいても学生と教員の関係は続いているので、本心を的確に把握可能か不確定であったためである。

なお、目標以外で実施結果として、有益なものをその他としてまとめた。

（1）興味の充足

及第点をつけられるものが、提供できたと自負する。特に学生から「4年生の大学では、ゼミナールがあり研究室で活動できると聞いていたが、短期大学では無理と思っていた。こうして取り組めることが楽しい。」と言われたときは、尊敬と感謝の気持ちがいっぱいになった。

（2）研究の基礎知識の付与

はじめに質問紙の検討に関わらせたことが良かったと考える。これにより調査研究が単に机上のものでなく、実際に目で見られるものになった。そして、その質問紙によって実際に回答されたものが集まり、集計していく流れの中で、研究を体感し理解したと考える。

（3）研究室におけるマナーの付与

参加した学生のほとんどが、元々マナーに大きな問題が無かったと思われる。

（4）学習・研究に関する協力体験

多くのデータを入力するために分担して実施したが、十分な精度までの入力結果に持っていくまでは、いくつかの問題があった。一つは、ある程度入力した場合は、入力した個人が最後

まで一人あるいは数名で最後まで入力する傾向があった。また、入力は実施するが入力内容のチェックにあまり参加しないもの等の差があった。

これらのことに対して、筆者が一層の指導を実施することも可能であったが、目標の時期までに集計が出来そうであったので、最小限にとどめた。これにより 10 名の小集団であっても協力しなければ、時間の無駄が生じる等についていくらかの理解が出来たのではないかと考える。

（5）学生と教員のコミュニケーションの向上

他の新入生から不満が出るほど、良いコミュニケーションが取れたと思う。

（6）本学教育理念の理解

自律については、かなり実現できたと思う。プレ・ゼミ生が自ら考え、相互に注意しあい、また筆者に提案するなど多数あった。

（7）その他

その他として、学生の性格・能力の理解がある。プレ・ゼミ活動を通じ、性格・能力がわかったことにより、班別活動の配置等に活用することが出来た。また、プレ・ゼミ生は、クラスの中に一定の活気を与えてくれたと思う。

5．考察

5・1　参加者の特性

職業系学科の新入生が多く参加するであろうと予想通りの結果であった。農業系が新入生 4 人に対して 4 人、調理系が同 11 名に対して 3 人の参加があった。調理系新入生の 4 人が男性なので女性に限れば、7 人中 3 人が参加したことになる。これら農業や調理といった単に理論だけではなく、行動を伴う勉強を実践してきた者は、実に柔軟に課題に取り組む能力を有する。また、そこに普通科出身者が入ることにより、安定したバランス感のあるプレ・ゼミ活動が出来たと思う。

本学科は、女性がほとんどなので、参加者全員が女性だったことは当然かもしれない。もしくは、女性のほうが意欲的である可能性がある。男性の奮起を願う。

5・2　教育効果

教育効果で重要と感じたことは、教員と学生の間で一定の信頼関係が構築されたのではない

かという点である。筆者のみならず、共同研究者及び助手と共に研究することにより、通常の講義では経験できないコミュニケーションを体験し、他の学生に対して多くの時間を共有できたことが良かったと考える。また、プレ・ゼミ生の多くは、元々積極的であり、指導的立場の性格であったかもしれないが、班別学習の時等でよく活躍したと思われる。

5・3　反省点と今後の取り組み

後期になっても研究のお手伝いに対する申し出があった。筆者は、それに対して適切な題材を提供できなかったことが最大の反省点である。したがって、今後は積極的な学生に対する安定した題材を準備することが望ましいと考える。また、本学の制度として、このような活動を取り入れることが望ましい。そのためには指導教員の時間確保、助手の援助が不可欠である。

来年度に計画している通年のゼミナールと連動することも有効ではないかと考える。

6．結論

本学の新入生は、知的好奇心が旺盛な学生が多数いる。その学生は、学会発表で使用する調査のお手伝いを時間内にこなす能力を十分に有している。今回の試みであったプレ・ゼミ生制度は、積極的な学生をのばし、クラスに活気をあたえるなどの一定の効果があったと考える。

また、教員は学生の知的好奇心を満たす題材と時間を確保することが重要である。

7．謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの人にご協力をいただいた。本栄養健康学科の教員助手の方には、着任して間もないものに対して、新しい試みを実施することに賛同いただき、多大なるご協力をいただいた。星槎国際高等学校福岡学習センター長古川潔氏には、最近の周辺地域の高校生の状況をお教えいただき、また本報告書の作成にあたり様々なことをご教授いただいた。感謝いたします。

国立東京工業大学工学部附属工業高等学校教官中村豊久（当時）、千葉県立衛生短期大学栄養学科教授（故）高居百合子、助手渡邊邊智子（当時、現在は教授）の教えがあったので、今回の試みの発想があり、一定の成果を得ることが出来た。深く感謝いたします。

そして、積極的に参加してくれた本学栄養健康学科学生の長部麻美、柏木朋子、久保田朋子、神代聡美、兒玉佐知子、下栗智恵美、下土井芳江、廣瀬里枝、八塚華奈、山本千里の学生に深く感謝します。

参考文献

1）水津久美子：「1年次からの学習意欲の向上を目指して」，平成18年度全国研究教育栄養士協議会中国・四国ブロック研修会資料，34-39，2006，山口
2）吉村庸ら：短期大学からの挑戦，319pp.，㈱南の風社，1996，高知